

るなど千歳の今に顯然たるは、神秘の密法を下民に示し給ふならん、かくて諸病者此大文字を拜して祈願するに、靈驗有て平癒を得し人多し、想ふに七月十六日夜は、亡靈の送り火とて、諸國に爐火を奠す、此義經説にも所見なく、また緇素其由縁を知らず、また正月元旦は、年月日時皆陽數なり、當夜は則其裏なり、黒年黒月黒日黒刻にして、悉く陰數なり、故に増益の柴燈護摩を焚て、諸惡氣諸亡靈を退散せしめて、天下太平國土安穩の祈禱をなし置給ふこと、思へり、此夜また北山に船形を焚火は、則異船燒打の表示にして、蒙古異賊を調伏の護摩爐たる事跡ならん、さて或書に曰、延曆年中より、例歲三月、鹿谷靈鑑寺の峯に北辰を祭り、伐木して山川の神々に捧ぐ、これを御燈と云、こは異邦堯舜の例を摸したるとなり、御燈遙拜のことは、書經舜典に見えたれども、彼國には古風亡びて、皇國には今も御遙拜の例ある事にあらずや、斯て思へば、村人カナワといひ傳ふる所は、此御爐に用ひし鐵輪かねわの舊地なるべく、其は往昔弘仁中、天下飢饉して、疫病流行せし事あり、大師其頃より、此鐵輪を中央に置いて、上下左右に七十五の火を添て、大の文字を作り改め、月も七月十六夜になし給ふこと、天地陰陽の妙數を取て、玉體安穩、寶祚悠久を祈らせ給ふ、其を村人の勤め來しなるべし、其古へは相當の下行をも賜はりつれども、數百年來世の亂れ打續きて、其事絶はてしとぞ、予火氣の早く衰へる事を歎き、年々薪の助力をなせり、同志の人は、聊にても此助力をこそあらまほしけれ、因みに云、同じ夕べ松ヶ崎の山に燈火する妙法の二字、此は白像上人、大文字を倣ひて、作り給ふこと必せり、さるを大文字は、足利將軍家の時に始めりと、いふ説は、金閣寺山なる、左、大字の事なり、其を籬島が都名所圖會に、銀閣寺の所に出せるは、甚だ誤れり、此如意嶽の大文字は、弘法大師の御作なることは、其筆法點畫の微妙なる、何者かまねふべけん、

〔雍州府志山川〕慈照寺山略○中

毎年七月六日、慈照寺淨土寺兩村民、登山伐松木、長二三尺許、歸家